

平成十八年度「花のまわりみち」

木村 里風子 選

特選

(三句)

「特選一席」

花の昼硬貨打つ音休みをり

出上 洋子

(評) まわり道に人が溢れている昼のひとときである。花を賞でいたときは工場で音がしていたがぴたりと音が止んでいるのである。静寂のひとときを捉えた句である。

「特選二席」

街騒をへだて楊貴妃桜かな

山本 定子

(評) 楊貴妃は中国唐の玄宗の妃、才色すぐれた美女であったが安史の乱で殺されたという悲運。静かに眠りたいであろう。街騒から離れてである。

「特選三席」

八重桜房が夕日の只中に

中植 紀子

(評) 美しい景である。夕日の真ん中で揺らぐ毬のような花、花の色と夕日が重なっているのである。

入選

(五句)

野球中継もれ来る花の廻り道

河村 幸子

物忘れ進みし夫と花の径

谷口 千恵子

リハビリの足に舞い散る花吹雪

溝部 幸恵

琴の音に頷く妻と花めぐり

堀 淑子

花巡る白寿の母と古希の子と

宮下 ならう

佳作

(二十五句)

花に会ひ花と別れる真昼時

竹本 君代

真向ひに落花の風を浴びにけり

滝原 秀子

ゆるき歩をさらにゆるめて花の道

原本 芳子

花吹かれ影の吹かれて風おどろ

山岡 祥子

外つ国へ旅立つ友と花の下

佐藤 宏恵

良寛の一句を思ひ出すさくら

吉川 徳子

琴の音は十段花は満開に

梶本 操

花散るや雨に灯ともし銭造る

亀井 朝子

地をすりて雨情杖垂れといふ桜

住田 祐嗣

二駅の列車の旅や八重桜

三宅 建子

吹くを待ち散るを惜んで八重桜

末光 雅敏

みどり児を抱かせて貰う花の下

増本 美代子

花枝垂れ苔むす幹の太きかな

中植 勝己

車椅子押して見上ぐる桜かな

酒井 和子

サングラスはづし確かむ花の彩

宮本 恭子

月の暈ゆさゆさ桜眠りたり

神波 瑞江

まわり道それも良ろしき花の縁

煙石 博

風立ちて花のつむじに囲まれし

斉藤 金二

花の名を口ずさみつつ車椅子

中原 トシコ

幼児の顔をうづめて花手毬

野津 訓子

花の名をおぼえて忘れまわり道

笹山 芙美子

青空とさくらいろいろしたランドセル

坂田 典

一年一組さくらの花がきれいだな

岡本 みゆき

さくらさんはずかしそうにまだつぼみ

みよし なお

さくらちるころはランドセルいちねんせい

坂田 匡弥

選者吟

楊貴妃てふ桜に雨の傘たたむ

木村 里風子